

近代中国における商業地区の形成過程に関する基礎的研究 : 北京王府井地区を対象として

于, 小川

<https://doi.org/10.15017/1398260>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2002, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

第五章 終章

本研究では、中国の伝統都市における近代都市空間の形成と変容に注目し、北京市の近代商業地区である王府井を取り上げ、近代化の過程を明らかにすべく特に第3章と第4章において王府井商業地区と地区の商業である核東安市場を対象に、文献資料を中心に考察を行った。そこで得られた結果は以下に挙げるものである。

5-1 既存都市空間の継承

都市空間から見た場合、王府井商業地区と東安市場の形成と発展は元時代に既に構造の確立していた王府井大街と明、清時代において細分化された街路（特に東西方向の細街路「胡同」と既存施設の敷地の活用であったことが分かる。すなわち既存の都市空間を継承して成立した点を挙げられる。

まず、第3章の第2節において、王府井商業地区の中心軸である王府井大街は元時代に形成され、さらに地図及び資料に示したように、明、清時代の王府井地区にあっては街区の再編成が行われ、さらに清末の道路工事及び民国の市区改正により都市基盤再整備が行われ、結果的に王府井大街の幅員が拡張されたが、これらの事業によっても基本的な地区の骨格は変わっていないことが分かる。そして本研究で示したように商業施設はこの地区の主要道路王府井大街とその従街路沿いに配置された。その理由としては、上述のように王府井地区は元、明時代において官庁地の性格を持ち、さらに清時代に多くの官舎が位置するなど、高級住宅地の性格を持っていた点が挙げられる。この大規模な施設用地は近代的な商業施設の立地に大きな契機を与え、さらに第4章の第2節の考察で示したように、王府井商業地区の商業核となる東安市場の敷地は明時代の「十王府」、清時代の「賢良寺」、「八旗神機營練兵場」を転用するものであった。東安市場はこの大きな敷地を利用し、北京最大の市場となる物理的な条件を与えられていたといえる。このように、近代的な商業地区の成立は近代以前の都市骨格を継承し、その後の地区の官庁地、高級住宅地といった都市機能が空間的同一性を維持しながら転化され、近代都市空間において、新しい商業機能の誕生に結び付いたといえる。

次に、第2章において、北京の都市空間において南北方向の道路は幅員の広い幹線道路が多く、一方東西方向の道路幅員は狭いという特徴を指摘した。これにより北京近代以前の既存商業空間はこの都市構造の影響で線形的な空間構成が多いことも指摘した。王府井大街は王府井地区の幅員広い幹線道路のため、必然的に交通量が多い性格を持っていた。さらに、民国時代の都市交通機関の発達により、王府井大街は北京の交通結接点となったことは、多くの商業施設が王府井大街沿いに立地した要因の一つであった。1930年代以

後、王府井大街とつながる胡同（細街路）に商業施設が進展したが、店舗数を見ると王府井大街が圧倒的に多く、中心商店街の役割を果たし、近代的な商業空間も既存商業空間も同じように線型的な空間構造を持つことが捉えられた。

このように、王府井商業地区の成立と発展は主として近代以前に造られた既存都市空間を受け継ぎ、以前の都市機能を商業に転化させたと指摘できる。この点において、北京における近代的な商業空間は元、明、清時代に造られた都市の全体構造と大きく関わって発展して来たといえる。

5-2 計画的な商業地区の形成

第2章において、既存の商業空間は廟会や定期市など都市の人々の生活に密着した、きわめて重要な意味を持っていることを指摘した。そして、これらの市の開かれる場所は、普通は集落の道路や寺廟の広場などの公有地で自律的に成立したものがほとんどであった。

しかし王府井商業地区においては、20世紀初めの清政府による国力の強化、体制の再編成による近代化への努力、国体強化といった「新政」の中で重要な役割を果たす「奨励工商章程」実業振興策の影響で、巡警総庁を初め、政府機関の計画により東安市場を成立させた。また、第4章で分析したように、市場の形成と発展は清から民国にかけての時代、政府が西洋の先進的な市場建設・経営方法を取り入れ、多くの市場管理、経営法をつくり、北京で初めての官立常設市場を成立させた基本的姿勢と関係している。

商業地区において、第3章に見られるように、1914年北京初めての市政建設機関である京都市政公所の成立により外国の都市計画経験を取り入れ、北京は海外西洋都市に比肩する素晴らしい都市をめざした。そして、王府井地区は都市近代商業の顔をとって、商業地区に不可欠な街路整備の面では民国の時代には王府井大街を中心に道路拡幅、路面舗装工事による煉瓦化、歩行道と街路樹の設置が行われ、近代化された商業環境が備った。さらに戦時中にあっては日本系百貨店、洋行が大街に進出した。以上のことより、王府井大街が北京における商業地区の手本として政府の指導で特別扱いを受けたことが明らかになった。近代以前の自律的に成立した商業地と商業施設を区別し、政府の指導により計画的に発生、発展を遂げたと言える。

5-3 民族意識と商業地区の形成

第3章に示したように「辛丑条約」が調印されたことにより、外国列強は正式に北京の東交民巷に公使館区を作り上げることに成功した。さらに外国公使館区の拡張行為、特に紫禁城近くの王府井大街へ外国の力が侵入することに対して、清政府は王権政治の危険性と朝廷の体面が失われる恐れを強く感じて、紫禁城に近い場所へ外国人商業施設が拡張

することを抑えるようとした。このことが東安市場を中心とする中国系商業施設を王府井大街に位置させた一因であることも指摘した。この外国勢力と対抗することは、近代的かつ中国民族資本で作られた王府井商業区の核店舗（東安市場）の成立の契機となった。そして東安市場の内部の繁栄とともに中国資本の小売り業を中心とした常設商店が次第に自然発生し、市場の周囲に成長していく結果に結びついた。

さらに民国以後、外国勢力の進出に対し民族企業を基盤にした国産品愛用運動が生じ、民族資本の高級品を扱う専門店や百貨店が大街に広がった。市区改正によって生まれた地区の近代化された商業環境の整備も外国人に対して中国側でも自らの手で立派な建物をつくれることの顕示であったし、王府井商業地区の形成と発展は外国の資本を拒否しながら、西洋の先進的な思想を取り入れ、中国側自らの手で近代化を達成するとの考えが基本的に存在していた。

5-4 王府井大街と東安市場の関係

第4章で指摘したように、中国政府は東安市場の機能を充実させ、整然とした統一性を持たすため市場に秩序を与えるよう、積極的に衛生面の確保市場や風紀などの規則を条例をもって制定した。前者にあってはその目的は達成され、市場の近代化が果されたが、一方後者にあっては市民生活の側面を無視し、娯楽施設が取締まりの対象となった結果、市場の営業は衰えた。このことは近代中国における身分階級社会の崩壊と西洋文化の移入により北京の市民生活が開花し、近代娯楽施設は市場繁栄の鍵であったことを示した。劇場、映画館の開設が多くの客を東安市場に引き込むことにより、さらにカフェ、ビリヤード場の登場は、市場の近代的な社交、娯楽機能をさらに充実させることにあった。このように東安市場の業種は多様化し、結果的に多くの客を王府井大街に呼び込めこととなり、市場の位置していた王府井大街の商業集積の機会はさらに大きくなった。

一方、第3章で分析した交通機関の発達により、王府井大街の南と北側が交通の結接点となったことで北京全城の市民を相手としはじめた新しい商店街が、より多くの人を呼び寄せるうえで有効な手段を手に入れることになった。結果的には王府井大街の公共的な性格がより高められた。この王府井大街を中心とした公共交通機関の整備は市民の行動範囲を広げ、容易に東安市場までアクセスすることを可能にした。

また商業機能から見た場合、王府井大街に位置する商業施設は主に高級品を扱う店舗が多く立地していたが、これに対して、東安市場は生活用品や飲食類など様々な業種が存在し、各階層の客を対象としていた。このことは市民の多様なニーズに応じる商業施設が王府井大街に開設されたことを意味し、この地区が北京の中心商業地区に成長していった背景には前門地区にない地区の高級性が備っていたことがあるといえる。

以上のような要因を基盤として、東安市場と王府井大街は相互に影響し、近代的な商業地区に進化した。

5-5 近代高級商業地区の形成

前述のように、1901年外国人公使館区が王府井大街の南に成立された。また公使館区内の人口の増加及び施設集積の急激・膨脹を原因として、大街の南到北京飯店の開設、二条胡同に外国人居留地を成立させた。この外国人のニーズによって、洋品や舶来品を中心とした高級商業施設が王府井大街に集積となった。すなわち、王府井地区が高級商業地区に発展した要因は、東交民地区における外国人居留地とこれに関連する近代施設の開設を発端とするが、歴史的に性格付けられた前門地区と異なり、他に何も無い、商業地としての無色性が、高級化と結びついたといえる。

次に、中華民国の成立により民族意識が高められ、民族企業を基盤にした国産品愛用運動が生じた。また外国人の人口増加や清代に残された貴族の邸や別荘の跡地を利用し、民国の官僚の住宅と教育施設がつくられた。この民国時代の上流階級の人々は北京市内城の東部に移住することになり、この地域の住民構造に変化を与え、民族資本の高級品を扱う専門店や百貨店が王府井大街の中部に成立された。以上のことは民国時期に王府井地区の高級商業施設の成立要因がもう一つ存在していたことを示している。中国内部の社会変革と強く関係していたといえる。

また、民国時代の市区改正は政府により行われ、外国人に対して北京が海外の西洋都市に比肩する素晴らしい都市となるように市街地を改善しようとした発想が基盤にあり、王府井地区の特に外国人公使館近くの王府井大街の側面を中心として道路の拡幅工事と路面舗装工事が行われ、王府井大街では近代化された商業環境が備えられ、多くの高級商業施設は大街に集中した。これらの計画の実行が北京の中で王府井が地価の一番高い地区にさせたとも言い換えられる。さらに、北京市民を相手としはじめた新しい商店街が、より多くの人を呼び寄せるうえで近代北京の交通機関の発達を、有効な手段と考えた点も指摘であるが、結果的には大街の公共的な性格をより高められることになり、大街に立地した商業施設は北京市の広域型商業施設となった。以上から考えると、この時期の諸事業は、大街が近代北京の都心として生まれ変わる方向性を決めたものであり、政府の政策が大街への商業施設と金融施設の集積を果たした一要因となったといえる。

日中戦争時期の王府井地区において、日本系企業にあっては欧米系商業施設と入れ替える形で、王府井大街の主要施設となった。当時の条例と旅行案内の記事により王府井大街は北京の中心商業軸として機能することとなったといえる。商業地区の繁栄は戦争の影響を受けず、以前の繁栄を保っていたと推察できる。その背景には大街が北京商業地区の手

本として政府の特別扱いを受けたことにあると思われる。

5-6 今後の課題

本研究は中国北京市の王府井商業地区を取り上げ、時間軸から近代商業地（商店街と商業施設）の変容過程における形成と変遷の契機と原因を明らかにした。この研究成果は現在明、清時代に残された都市構造を継承して、都市化を進められた北京の都市開発特に商業地区の開発と再整備においても応用出来できると考えられる。

現在北京の都市開発事業は、伝統的に都市の基盤整備、幹線づくりに重点を置いている。近代の北京において幹線道路が形成された東四商業地区、西単地区の商業施設に関しては、計画的に整備された点が指摘が出来る。しかし、現在は単にものを買う商業施設が多く、都市計画の立場から市民のコミュニティ施設として商業地を整備することや商業施設の開発者が北京の都市全体の中からそれぞれの商業地はどのような個性をもつのか、その位置づけをする必要性が感じられる。この観点のもとで商業地の再整備を行うことが必要と考えられる。この点は本研究の第三章で示したように王府井地区の住民構造の変化によって、商業地の性格が変わってきたことを適応できると考えられる。また、現代、交通施設の発達によって商業施設の立地は広域型店舗が増えており、一方地区に相応しい近隣型店舗地区は減っており、大型店の立地と都市構成の関係性は都市全体面からの見地に立つ都市計画から検討される必要があるといえる。

以上に対して、北京の外城に位置する前門商業地区は、近代以前に自律的に形成された商業地であり、長い間に積み重ねられた商業・地区構造をもっている。この既存商業地の整備は歩行者専用道路整備、商業地区の防災計画などの立場から商業地の快適性や安全性などの認識がなされ、この改善が行われれば、この点は本研究の成果から得られたものと言えよう。